

即興で話すこと [やり取り] の力を育成する指導の在り方 (第一年次)

—コミュニケーション・ストラテジーを取り入れた学習活動の工夫—

長期研究員 鈴木 淳子

《研究の要旨》

本研究では、自分の考えや気持ちなどを臆することなく伝えることができる話し手と、話し手を支え、理解しようとする聞き手を育成することを通して、即興でやり取りする力を育成する指導の在り方を探った。その手だてとして、会話を継続・発展させるための話し方と聞き方を取り上げ、その使用の意識化と自動化が促進されるよう工夫した。その結果、発話語数とやり取りの回数に向上が見られ、不適切な間の長さが減少した。

I 研究の趣旨

次期中学校学習指導要領では、外国語科における学びに向かう力・人間性等に関わる目標として、「外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」ことが示された。また、話すことが [やり取り] と [発表] の二つの領域に分けられ、「関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようにする」ことが、話すこと [やり取り] の目標の一つとされた。その理由として、次期中学校学習指導要領解説外国語編では、「日常の会話から討論に至るまで、話し手と聞き手の役割を交互に繰り返す双方向でのコミュニケーションの機会が多いこと」が挙げられている。また、「やり取りを行う際は、相手の発話に応じることが重要であり、それに関連した質問や意見を述べたりして、互いに協力して対話を継続・発展させなければならない」とされている。文部科学省が中学3年生を対象に実施した平成29年度英語教育改善のための英語力調査では、「どの程度まで英語を身に付けたいと思っていますか」という質問に対し、「高校入試に対応できる力を付けたい」という回答(39.4%)が最も多かったが、それに次いで、「海外旅行などをするとき、英語で日常的な会話をし、コミュニケーションを楽しめるようになりたい」という回答(29.7%)が多かった。また、同調査において、「話すこと」の得点が高かった生徒の方が、低かった生徒よりも、授業の中で「与えられた話題について、(特に準備をすることなく)即興で話す活動をしていた」と回答した割合が高かった。実践協力校で実施した事前の意識調査でも、「英語を学習して何ができるようになりたいですか」という質問に対し、「話すこと」という回答が最も多く、45.9%を占めた。しかし、「英語の学習でいちばん得意なことは何ですか」という質問に対しては、「話すこと」と回答した生徒は6.5%と、最も少なかった。そこで、「話す

こと」、特に、考えや気持ちなどを即興で伝え合うやり取りの力を育成することが必要と考え、本主題を設定した。

II 研究の概要

1 仮説設定のための概念規定

次期中学校学習指導要領には、言語活動に関する事項の話すこと [やり取り] において、「関心のある事柄について、相手からの質問に対し、その場で適切に応答したり、関連する質問をしたりして、互いに会話を継続する活動」が挙げられている。Stern (1983) は、十分に習得していない第二言語や外国語でコミュニケーションを図ろうとする時に起こる困難に対処する技術を、コミュニケーション・ストラテジーと定義している^{*1}。次期中学校学習指導要領解説外国語編では、「会話を継続・発展させるために必要なこととして、①相手に聞き返したり確かめたりする (Pardon? / You mean..., right? など)、②相づちを打ったり、つなぎ言葉を用いたりする (I see. / Really? / That's nice. など)、③相手の答えを受けて、自分のことを伝える (I like baseball, too. など)、④相手の答えや自分のことについて伝えたことに『関連する質問』を付け加える (What kind of Japanese food do you like? / How about you? など)、などが考えられる」とある。本研究では、この四つをコミュニケーション・ストラテジーと定義した。

*1 Stern, H. (1983) *Fundamental Concepts of Language Teaching*. Oxford University Press.

2 研究仮説

以下の視点に基づいて指導を展開すれば、即興で話すこと [やり取り] の力を育成することができるであろう。

【視点1】やり取りの振り返りと教師からのフィードバックを通じたコミュニケーション・ストラテジーの意識化

【視点2】段階的な話題の提示を通じたコミュニケーション・ストラテジー使用の自動化

3 研究の内容

(1) 【視点1】について

① 手だて1〈振り返り〉

やり取り後すぐにパフォーマンスを振り返らせ、自分が伝えた表現や内容、相手が話した内容について記録させることで、使用したコミュニケーション・ストラテジーを意識化させる。

② 手だて2〈フィードバック〉

コミュニケーション・ストラテジー使用の優れたモデルを示し、言葉による価値付けを毎時間行う。

(2) 【視点2】について

① 手だて1〈同じ話題でのやり取り〉

同じ話題でのやり取りを繰り返し行わせることで話す内容や使用する表現に慣れさせ、コミュニケーション・ストラテジーの使用に意識を集中させる。

② 手だて2〈異なる話題でのやり取り〉

コミュニケーション・ストラテジーの使用に慣れてきたら、毎回のやり取りの話題を変えることで、コミュニケーション・ストラテジーを無意識に使用できるよう自動化させる。

4 研究の実際

(1) 授業実践 I

第2学年（2クラス 61名）
Unit 3 Career Day [6月, 10時間]

やり取りを継続させるテクニックとして、本研究で定義した四つのコミュニケーション・ストラテジーを具体的に指導し、それらを使ってペアでやり取りを継続させる活動を毎時間行った。実践 I のねらいは、①コミュニケーション・ストラテジーを使用することでやり取りを継続することができるという有用性を感じさせること、②意識すれば、コミュニケーション・ストラテジーを使用することができるようにすること、とした。帯学習では毎時間同じ話題でのやり取りを行い、展開やまとめの段階ではその時間に学習した表現を用いたやり取りを行った【視点2-①】。やり取りが継続した時間を記録させ、どの程度できたのかを振り返らせるとともに、次のやり取りへの見通しをもたせた【視点1-①】。毎回パートナーを変え、話題を与えて（図2）やり取りを行い、その様子を動画に撮影し、コミュニケーション・ストラテジー使用について分析した（図3）。

実践 I では、同じ話題について繰り返し取り組ませることでストラテジー使用の練習に集中させた。相手が話したことについて相づちを打って反応を示す回数と、さらに質問を付け加える回数が増えた。しかし、実践時間10時間では四つ全てを使えるようになるまでには至らなかった。

- ・昨夜、家でしたこと（帯学習）
- ・いつかやってみたいこと（展開）
- ・将来の夢に向けて、今どんなことをする必要があるのか、自分の考えを伝える（まとめ）

図2 与えた話題の例

ストラテジーの種類	事前	事後
①相手に聞き返したり確かめたりする	2	0
②相づちを打ったり、つなぎ言葉を用いたりする	4	39
③相手の答えを受けて、自分のことを伝える	1	0
④相手の答えや自分のことについて伝えたことに「関連する質問」を付け加える	16	39

図3 使用したストラテジーの種類と回数の変容

コミュニケーション・ストラテジーが使えるようになったことで、生徒のパフォーマンスがどのように変化したのか、発話語数、やり取りの往復数、不適切な間の発生について分析した（図4）。

30秒のやり取り	事前	事後
1ペア当たりの発話語数の平均	16.9語	37.8語
1ペア当たりのやり取りの往復数の平均	1.75回	3.73回
不適切な間（3秒以上）が発生したペア数の割合	73.1%	23.1%
1ペア当たりの不適切な間が発生した回数の平均	1.7回	1.5回
1回当たりの不適切な間の長さの平均	6.56秒	4.89秒

図4 実践 I のやり取りにおける事前と事後の変容

1ペア当たりの発話語数、ペアでのやり取りの往復数に伸びが見られた。不適切な間が発生したペア数の割合が大幅に減り、1回当たりの沈黙の長さの平均が短縮された。

(2) 授業実践 II

第2学年（2クラス 61名）
Unit 5 Universal Design
Daily Scene 5 道案内
Unit 6 Rakugo in English [10・11月, 10時間]

実践 II では、やり取りの話題を毎時間変えて行う帯学習に取り組ませた【視点2-②】（図5）。

- ・文化祭の思い出
- ・好きなアニメ（テレビ、音楽）
- ・今、いちばんがんばっていること

図5 与えた話題の例

一つの話題につき、ペアを変えてやり取りする機会を2回設け、1回目であまり言えなかったことを2回目で修正できるようにした【視点2-①】。また、活動終了後には、やり取りの中で自分が使ったストラテジーを書き出させ、使えるようになっていることを自覚させたり、自分が伝えた内容と相手が話した内容を書き出させたりすることで、ストラテジー使用だけを目的としたやり取りにならないよう、内容に意識を向かせて活動に取り組ませるようにした【視点1-①】。また、毎回1ペアのやり取りの様子をモデルとして学級全体に提示し、良好な

態度や表現を教師が価値付けしてから活動に取り組みせたり、活動の途中で語順や文法の間違いがあった時はそれを提示して修正させたりするなどのフィードバックを行ったことで、より適した表現を用いたり、語順や文法にも意識が向いたりするようになった【視点1-②】。授業の展開段階でも、教師と生徒のやり取りや生徒同士のやり取りの機会を多く設定して教科書本文の内容理解を深めたり、自分の考えをもたせたりすることで、授業全体が即興でやり取りする練習となるように工夫して授業を組み立てた。実践Ⅰと同様に、生徒のやり取りを撮影した動画を分析した。ただし、話題への慣れによる繰り返しの効果が生じないようにするため、1回目のやり取りのデータのみを抽出し、比較した(図6)。

60秒のやり取り	事前	事後
1ペア当たりの発話語数の平均	12.3語	29.0語
1ペア当たりのやり取りの往復数の平均	1.60回	3.73回
不適切な間(3秒以上)が発生したペア数の割合	85.0%	85.0%
1ペア当たりの不適切な間が発生した回数の平均	1.9回	1.6回
1回当たりの不適切な間の長さの平均	15.2秒	10.9秒

図6 実践Ⅱのやり取りにおける事前と事後の変容

初めて扱う話題であったにも関わらず、実践の前後で発話語数とやり取りの往復数に2倍以上の伸びが見られた。一方で、不適切な間が発生したペア数の割合には変化はなかった。発生回数にもほぼ変化は見られず、不適切な間を発生させずにやり取りを継続させることに課題が残った。しかし、不適切な間の長さは減少し、以前ほど長く沈黙をおかず次言葉が出やすくなったといえる。さらに、実践Ⅱによってコミュニケーション・ストラテジーの使用にどのような変化が生じたのか分析した(図7)。

ストラテジーの種類	事前	事後
①相手に聞き返したり確かめたりする	2	1
②相づちを打ったり、つなぎ言葉を用いたりする	5	23
③相手の答えを受けて、自分のことを伝える	1	15
④相手の答えや自分のことについて伝えたことに「関連する質問」を付け加える	9	34

図7 使用したストラテジーの種類と回数の変容

使用したストラテジーの種類と回数において、相手に聞き返したり確かめたりする項目以外は大幅に増えた。実践Ⅰ、Ⅱの20時間で、相手の話に反応しつつ、さらに内容を展開させながらやり取りを継続することができるようになってきたことが分かる。つまり、生徒にとって身近で関心のある話題であれば、初めて話すものであってもコミュニケーション・ストラテジーを使用しながら、

即興でやり取りする力が向上したといえる。

実践Ⅰでは同じ話題で30秒間、実践Ⅱでは初めての話題で60秒間のやり取りを行った。また、実践Ⅱでは、繰り返しの効果が生じないようにするため、1回目のデータのみを抽出している。図4と図6を比較してみると、実践Ⅰから実践Ⅱにかけて、やり取りの力が低下しているように見えるが、これは、実践Ⅰでは同じ話題での繰り返しの慣れの効果が生じたことが要因であると考えられる。実践Ⅰがコミュニケーション・ストラテジーを身に付けること、実践Ⅱがコミュニケーション・ストラテジーを意識しなくても使えることをねらいとしたが、それぞれの条件下においては、生徒のやり取りのパフォーマンスは向上した。コミュニケーション・ストラテジーを取り入れた活動を行うことで、話すこと[やり取り]の力が向上し、それを継続すればさらに定着することが期待される。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

コミュニケーション・ストラテジーを使用することに慣れさせてから、初めての話題でのやり取りに取り組みさせたこと、よいモデルや教師からのフィードバックを参考にしよりよい表現を用いたり活動の振り返りからストラテジー使用とやり取りの内容に意識を向かせたりすることで、即興でのやり取りにおける発話語数、やり取りの往復数が向上し、不適切な間の長さが減少した。

2 今後の課題

コミュニケーション・ストラテジーを取り入れた目的は、やり取りにおいてうまく会話を続けることができない時でも、何とかして自分のことを伝え、相手のことを理解することができる力を養うことであった。しかし、生徒のやり取りの中には、コミュニケーション・ストラテジーを使うことや、やり取りを発展させずにただ継続させることに終始してしまう一面があった。理由や根拠を述べたり、例を示したり、言い換えたりするなど、話す内容の質的な向上を図ることが必要である。また、不適切な間の発生が依然として多かった。これは、話し手が沈黙してしまった時に、聞き手も沈黙してしまったことが原因であると考えられる。やり取りは話し手だけで成立するのではないことに気付かせ、聞き手として話し手を支えようとするなど、積極的にやり取りに関わる態度をさらに育成することが必要である。様々な表現を含んだモデルを示しながら生徒が使用する表現の多様化を図り、より自然で質的に洗練されたやり取りの力の育成を目指していきたい。